



七徳堂鬼瓦

アウトリーチとインターフェース

科学技術創造立国が叫ばれ、科学技術基本法が制定されて10年が経つ。科学技術は、科学者・技術者の不断の努力によって進歩し、適切な後継者に引き継がれてさらに発展し多様化する。昨今の「理科離れ」、すなわち初等・中等教育レベルでの自然科学分野への関心が先細り傾向にあることは、次世代の育成という点で大いに気がかりである。

そもそも科学技術の進歩は、我々の社会に還元され、生活を豊かにするものでなければならない。そのためには、若年層に限らず、広く一般社会

人にも科学技術の基礎的素養（リテラシー）が求められている。最近「アウトリーチ」という言葉をよく耳にする。科学技術の面白さを積極的に社会に普及する広報・啓蒙活動のことだ。しかし言うは易いが、いざ自分の研究の内容や成果を、小中学生や一般大衆に分かりやすく伝えようとする、これが存外難しい。精一杯頭をひねってプロットをまとめ、見やすい図を描き、噛み砕いて話をしたつもりでも、期待したほど反響を得られなければ、結局独り相撲の悲哀を味わうことになる。

5年以上前になるが、カリフォルニア大学スクリップス海洋研究所で、所長補佐の女性研究者と話をして驚いたことがある。彼女の専門は何と国際関係論で、彼女の主要な業務は、一般社会や政府と海洋研究者との間を取り持ち、双方向のバリエーションを除いて情報をスムーズに流すことなのだという。以前の勤務先はNASA（米国航空宇宙局）で、そこでの手腕を買われて引き抜かれたらしいが、NASAの全職員1000名の中に、彼女のような役割を果たすプロが20名いると聞いてさらに驚いた。

いま一般社会と科学技術の最先端との距離が徐々に開きつつある。興味深い話題を提供したり、実験・実習に参加してもらうなど、研究者自身によるアウトリーチは可能だがやはり限界がある。また一過性のものである限り、その記憶は氾濫する情報の海に容易く飲み込まれてしまうだろう。いくら種を蒔いても芽が出なければ意味がない。科学技術の魅力や重要性が、社会に自発的に認識されるレベルまで、何とか近づけなければならない。一般社会と研究者の双方の立場に立ち、インターフェース（仲介者）の役割を継続して果たすことのできるプロ集団の有無が、今後の科学技術の健全な発展の死命を制するよう思われる。

蒲生俊敬（海洋研究所）

（淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

〔訂正〕

「学内広報」において、一部誤りがありましたので訂正します。

関係部局、関係者の皆様に深くお詫び申し上げます。

No.1329（2006.2.8）

18ページ右段17行目

誤：新領域創生科学研究科

正：新領域創成科学研究科

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、総務部広報課を通じて行ってください。

No. 1330 2006年2月22日
東京大学広報委員会

〒113-8654

東京都文京区本郷7丁目3番1号

東京大学総務部広報課

TEL：03-3811-3393

e-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

http://www.u-tokyo.ac.jp